障がいに対する理解を深める研修・啓発活動講師団　ニュース

～障がいの有無にかかわらず、お互いに認め合い、思いやり、支え合う社会をつくるために～

№5　2014.12.9

別府地区高等学校人権・同和教育研究協議会から研究大会への講師派遣依頼があったので、講演に行ってきました。
平成２６年１２月３日（水）13:40～14:50
会場：社会教育総合センター　多目的ホール

対象者は、市内高等学校職員約４０人です。
講師団からは、阿部留理子さんが出席して、障がいのある当事者という立場から内部障がいについて話をしました。

講演の流れ

① **障がいのある人が置かれている状況**（30 分間）
- 内部障がいのある人が置かれている実情を知ってもらいました

② **ともに生きる条例が果たす役割**（30 分間）
- 条例の概要を知ってもらいました

③ **皆さまへのお願い**（10 分間）
- 対象者へ「障がいに対する理解を深める」「合理的配慮を行う」ようお願いしました

内部障がいとは

身体障がいの一種です。内部障がいの種類には、心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう又は直腸、小腸、ヒト免疫不全ウイルスによる免疫、肝臓があります。一般的に内部障がいは、外見からではわかりにくいため、周囲の認識不足から、病気にもかかわらず職場を休めなかったり、障がいの等級が過小評価されたりするなどの問題があります。

発行：別府市福祉保健部障害福祉課
〒874-8511　別府市上野口町１番 15 号
TEL：0977-21-1413　FAX：0977-22-1780
E-mail：haw-hw@city.beppu.oita.jp
市ホームページ　URL：http://www.city.beppu.oita.jp

【阿部留理子さんからの講話】

私が障がい者になったのは、６年前です。直腸がんだけでなく、Ｓ字結腸がんもあって、手術しました。オストメイトの私の体験は、わずか６年ですが、その中で感じたことを述べていきたいと思います。

内部障がいの種類は、心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう、大腸、小腸、肝臓などの内臓によるものと、ヒト免疫不全ウイルスによるものがあります。これらは、外見ではわかりにくいため、誤解されることが多いです。電車などの優先席に座りたい、携帯電話の使用を控えてほしい、障がい者用駐車スペースに停めたいといったことがあります。

オストメイトマークというものがありますが、トイレなどでよく見られますので、皆さんもご存じだと思います。オストメイトという言葉や大腸がんの病気のことがわからなくても、渡哲也さんの病気だというとたいていの人は納得します。しかし、障がい者だということを知っている人は少ないのが現実です。

私たちオストメイトの悩みは、周囲の人たちに対して「におい」が気になることです。そのことが気になって神経質になる人も多いです。そのため、食べ物によって、ガスのにおいや大きく膨れるお腹も気になります。相手に不快感を与えるなども悩みになります。トイレに入っている時間も長くなるなどもあります。入浴についても人の視線を感じたり、そのためシャワーで済ましている人もいます。全国では、入浴拒否されたという報告もあります。

大腸がんの手術後、６か月経過した後、以前から行っていたミニバレーを再開しました。社会復帰が早くできたのは、私に合った装具に出会ったからです。ここに、ストーマ装具があります。これをお腹に着けています。場合によって、装具がはがれたり、皮膚に合わないときはかぶれて、かゆみと痛みで大変なことになることがあります。交換の日数は人によってまちまちです。

ミニバレーの仲間には、糖尿病だということは伝えていたのですが、半年のブランクの理由は話していませんでした。ミニバレーの後の入浴もやめました。そのときは、まだ、私がオストメイトで障がい者であるということをためらっていたからです。なぜなら、お腹にストーマを着けていることが恥ずかしかったからです。しかし、オストミー協会に加入してから変わりました。協会の行事に一泊研修として入浴がありました。そのときに、先輩オストメイトから指導を受けたのです。

私たちオストメイトは、ストーマに名前を付けています。私も「堪忍袋」とか「おフクロさん」といっています。特に「おフクロさん」というのは、ちょうど私が手術する前に他界した母のことを思い出すためです。そのときから父と再び同居しました。また、このときからおまけの人生だと感じています。

今は、オストミー協会の支部報づくりと体験談を会員と医療関係の人たちに話すことによって、自分の病気のことをカミングアウトできました。

老後の不安もあります。手が使えなくなったり、認知症になってストーマ交換ができなくなったらどうしよう。現に、高齢者のオストメイトも心配しています。糖尿病のインスリン注射と同じように、ストーマ装具の交換も家族の人が介助できます。最近介護士による交換もできるようになったのですが、まだ、看護士さんに依頼することが多いのが現状です。

オストミー協会の宮崎県支部からの依頼で、話をしたことがあります。テーマは「介護する立場」から「される立場」というものです。仕事の体験を通して、介護福祉士の立場から話をしました。内部障がい者の人たちは、障がい者というより、医療面から病人（患者）という意識があります。過去においては、仕事に就くとき、不利になることもありました。今は改善されてきましたが、まだまだ心のバリアは厚いです。

最後に、私の福祉についての思いを述べたいと思います。私が福祉の道をめざしたきっかけは、障がい児でした。ボランティア活動は福祉の実績にならないといいますが、いろいろな障がい者、高齢者の人たちと接していると、同じ人間だということを強く感じます。ともに生きていく、そこで友だちとなるのです。知り合っただけの人は単なる知人だと思います。糖尿病で入院したときから人に優しさを感じるようになり、胆石、大腸がんで入院してからはその気持ちがより強くなっています。私のモットーは「１人で１００歩あゆむより、１００人で１歩あゆむ者が尊い」です。そして、介護とは、人が支え合ってできていると同じように、人と人とのつながりで生きていけると思います。

最後に、私の尊敬するマザーテレサの祈り「わたしをお使いください」をお聞きください。

（曲を流す）